



宮崎恭介院長

鼠径ヘルニア

高齢化で患者が増えたが、機材などの進歩で日帰りや短期入院の手術が普及してきた。

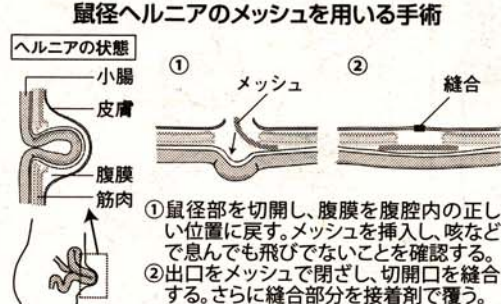
取材・構成 恵原真知子

俗に脱腸と呼ばれる鼠径ヘルニア。こどもの病気と思われがちだが、実は中年に多く、高齢化の影響もあって手術件数（年間十五、六万件）は増加傾向にある。鼠径部は脚の付け根を、ヘルニアは体の組織の一部がはみ出した状態を指す。鼠径ヘルニアは、本来お腹の中にあるはずの腸などの一部が、弱くなった（小児の場合は先天的に穴があいている）筋膜から皮下にはみ出した状態だ。軽いうちは手で押せば戻るが、放置すると痛みを生じ、押ししても戻らない嵌頓という事態に陥る危険もある。

放置して気持ちのよいはずもないが、手術となれば気軽にとはいかない。まして「簡単、手軽」が売りの近視手術でもトラブルが起きたばかり。年間十数万件というヘルニア手術では、簡便さと安全性や確実性は共存できるのだろうか。〇三年の開院以来、一日二、三例、年間約四百例の日帰りヘルニア手術を行っているみやざき外科の宮崎恭介院長に聞いた。

「従来のヘルニア手術は、開腹して緩んだ筋膜を縫い縮めることで強化を図る、大がかりなものでした。最近の手術は、一言で言えば弱った部分にメッシュ（ポリプロピレン製の網目状シート）を裏打ちして補強する身体負担の軽いものです。メッシュは腹圧でくっつき、内部の縫合が不要なので、切開口も三〜五㎝ですみます。メッシュの種類や手術法は数種類あって病状に応じて選択しますが、再発を防ぐ工夫には執刀医の実力が反映します」

現に、やり直しを求める問合せや患者が、遠方から



も多数あるそうだ。宮崎院長の手術所要時間は約一時間。術後一時間後には自力でトイレに行け、回復室で四時間ほど過ごしながら昼食をとって帰る。八十代の人でも殆どこのコースだ。術後一週間後・一カ月後の診察を勧め、遠方の患者は相談のうえ決める。

自己負担額は五万円程度

「この身体への負担の軽い手術の背景にはメッシュの普及があり、短期回復を可能にしたのは鎮静薬や鎮痛薬を含む麻酔関連技術の向上によるところが大きいと思います。当院では、局所麻酔で、患者さんと話しながら手術を進めます。局所麻酔は、若い世代は背骨の部分から細いチューブを挿入し局所麻酔薬を持続的に注入して痛みを完全に抑え（硬膜外麻酔）、高齢の方には作用時間の異なる局所麻酔薬を手術部位に適宜注入して無痛状態をつくりま

す。ただし、これだけでは不安や緊張は解消できないので鎮静剤と鎮痛剤を投与する静脈麻酔を併用します。

縫合系なども、施術後一カ月半で溶ける抜糸不要のものを用いています。同時に術後はいつでも私と直通電話がつながる体制をとっているのです、これも安心材料の一つでしょう」

これらの薬は手術中にはしっかりと効くが投与を中止するとすっきり覚醒する優れたもので、とても重宝しています。術後は一週間の鎮痛剤服用を守っていただき、抗生物質は無用です。

同診療所はJR札幌駅の駅ビル内にあり、三十坪の床面積に手術室や診察室などが収まっている。「感染防御は、狭くても清潔管理を徹底し、極力使い捨て製品を使うことなどで解決できます。必要な費用をケチると結果的に患者さんを余計な治療で苦しめ、医療費も不経済ですから」

ちなみに日帰り手術の総額は約十五万円。ヘルニアを疑いながら受診をためらっている人やヘルニアバンドの利用者（長期利用は臓器癒着にもつながる）は、早めに専門医の診断だけでも受けてはいかががらう。